

「生活できない」という結果に至った」といふ理由で、いかに壮大なあら探しの包囲網に取り巻かれるのかを改めて目の当たりにした思いだった。

年末年始、オリンピックセンターで対応された人たちが1月4日に1泊だけカプセルホテルに宿泊したのを「甘え」と称した産経新聞、朝と夜の食事数の違いだけから「2000人が無断外泊」と断じた朝日新聞、それらを受けて定例記者会見で「あの程度の行事」「甘えた話」と切り捨てた石原都知事……。年末年始、現場に張り付いて「コトの一部始終を見てきた人間としては、まともな生活が成り立たなくなるまで追い込まれた人た



論壇 湯浅 誠 (内閣府参与、反貧困ネットワーク事務局長)

水に落ちた犬は打て?

中、誰がやっても完璧なオペレーションは不可能だった。それは、去年、日比谷公園の「年越し派遣村」を主宰した者の実感でもある。あの時も現場は毎日大混雑だった。しかし、現場対応の不十分さをなかなかオプンにできず、利用者への説明が後回しになって、利用者の不安が高じていった。問題があったとして

たら、それは利用者に対して「説明と同意」だった。私はある利用者の言葉が印象に残っている。彼は私に訴えた。「ここに来た人間は、誰もが助けてもらってありがたかったという気持ちを持っていて。でも、冷たい対応をされていると、自分の中で『ありがたかった』という気持ちが失

きたと理解されたがゆえに、皆で世を徹してカプセルホテルの一部借増しをしたら、「甘え」と報道された。

1月6日、就職活動費として2万円が支給されたため、多くの人が外出手続きのために長い行列のできていた狭き受付の順番待ちで寒い中をじっと立ち、一時間

は、「無断外泊」「行方不明」と、いかにもわずかな現金だけが目当ての「タカリ」の集団のような報道に接する。

掲げの果てには、低家賃アパートを借りて、いつまたホームレス状態になるかわからない住み込み就労を渡り歩く悪循環から今度こそ脱したいと生活保護を利用すれば、他にアパートに入居できる施策のないセーフティネットの貧困や、生活保護受給が就労意欲の有無と直接の関係を持たないという事実は無視されて、いかにも就労意欲の低い、ラクして暮らしたい人たちの集まりかのように「甘えた話」と中傷される。

主に正社員を失業させないために企業に支給された雇用調整助成金は、09年度で6500億円余に達した。このお金の雇用が維持された人たちの中にはいろんな人がいただろうが、今のところ、ある一部の企業・社員が「好ましくない行為」が大々的に報道されて、「税金の無駄遣い」と非難される。彼らの場合には、費用が雇用調整助成金の1万分の1を超えたことでお金の使い道としての疑問を投げつけられ、一部にでも好ましくない人たちがいれば、それが彼らのすべてであるかのようにならざるに報道される。彼らも、これまで一生懸命働いて、社会を支えてきた人たちであるにもかかわらず、いま「生活できない」という結果に立ち至っているだけで、本能的には「推定有罪」と言わんばかりに、鵜の目鷹の目であら探しをされる。



元日の夜、派遣村の広告が風に吹かれていた

水に落ちた犬は、水に落ちたがゆえに打てないのだと考える社会の「品格」。今回、編集部から提案された内容は、「2010年を貧困解消元年」というテーマでの寄稿ということだったが、ここが変わらないかぎり、結局、日本の貧困率はOECDトップレベルを走り続けるだろう、と悲観せざるを得ない。